

A Burnt-Out Case

——自画像を描いてしまった男の話——

宮野祥子

I

〈船客は日記にデカルトのパロディを書いた「われ不快を感じず、故にわれ生けり」、それ以上書くことがなく手にペンを持ったままだった。〉という書き出しで始まるこの作品 *A Burnt-Out Case* は、1961年、グレアム・グリーン¹の作風が宗教的傾向からより社会的、世俗的傾向を帯び始めたころ発表されたものである。a burnt-out case とは「燃えつきた患者」ということで、癩菌に犯され、手指や足指の脱落した後で、ようやく全治した癩患者のことである。作品はこの状況を、主人公 Query の心理的・精神的状況とパラレルに置いて²、燃えつきた肉体と精神をかかえた Query に、あてのない旅立ちをさせ、人間が存在することの意味を追いかけたものであると考えられる。以下、一つの手がかりとして、Query についての描写のなかで、笑いに対する彼の興味深い反応と、彼の笑いの表情を追いながら Query 像を追ってみたいと思う。なおテキストは Heinemann 社の1961年版である。

II

Query の系譜を辿るならば、*The Quiet American* における Fowler にその祖型を見い出すことができる。Fowler は自律的な、自己の生き方に確信をもった人間から、不安と苦悩を知る人間へと変貌したのであったが、

ささやかな安らぎを日毎の生活のなかに見つけて、生き続けて行くことのできる存在であった⁽²⁾。このような Fowler の姿をさらに一歩進めて、日毎の生活そのものに疑問を抱き、仕事も愛も実は虚構のもの、身振りだけのものでしかなかった、という空虚さを識り、行き詰ってしまった男が Query なのである。

作者グリーンはこの *A Burnt-Out Case* という作品を創作するにあたり、1959年1月末から3月上旬まで、ベルギー領コンゴ（コンゴ共和国）を取材旅行している。その折の日記を *Congo Journal* と名づけて、この作品と同年に出版している⁽³⁾。その冒頭1月31日付の日記の中でグリーンは次のようなことを書いている。

...All I know about the story I am planning is that a man 'turns up', ...The novel is an unknown man and I have to find him: a situation that I cannot yet even vaguely imagine: a background as strange to me as it was to him at his first entrance.

（私がかくろんでるストーリーについて私にわかっていることといえば、一人の男が「姿を現わす」ということである。（中略）小説は正体の知れない男についてであり、私は彼を知らねばならぬ。私がまだほんやりとも想像できない状況、彼が初めて登場するとき彼と同様私にも見当のつかない背景。）

さらに2月4日の註では次のように述べている。註は後に付けたものらしい。

...the fact perhaps that I was already beginning to live in the skin of Query, a man who had turned at bay.

（おそらく私がすでに、追いつめられた男、ケリーの皮膚を着て生き始めていたという事実）

ここに作者が言い表わした〈an unknown man〉正体の知れぬ男と、〈Query, a man who turned at bay〉追いつめられた男、の二点が、作者のモチーフとしての Query に関する起点になっていると思われる。正

体の知れぬ男とは、おそらく作者の心の世界に、シルエットとなって執拗に霧のなかから姿を現わし続け、とうとうその実体を確かめねばならぬと作者を動かしたイメージであろう。作者はまた同じ2月14日付の日記の中で、その男、まだ名前も無いXについて、解明できない不可思議なところを残して置きたいと記している。

Yet I feel that X must die because an element of insoluble mystery in his character has to remain. Of course he could simply walk off like an early Chaplin.

(それでも、Xの性格について解明できない神秘的な謎の要素を残しておかねばならないから、彼は死ぬべきだと思う。勿論彼は初期のチャップリンのようにただ歩き去ることもできるのだ。)

従ってこの正体不明の男であることは、作者のモチーフであると同時に、登場人物 Query の一つの性格にもなっていると考えられるのである。

正体が知れないということと、矛盾するような設定ではあるけれども、追いつめられた男であるということが Query の性格の出発点でもある。Query は現在にいたる自分の人生の総決算として、空虚さしか残っていないという実感に捕えられた男であり、この意味でこれ以上先へ、今迄通りの生活を押進める意欲も、意志も、興味も、関心も持てないという極限状況が彼には設定されている。換言すれば、Query の物語は、50余年で自分の人生を生き尽してしまったと実感した男、人生の途中で結論の出ってしまった男、自画像を描いてしまったと自ら思っている男、の旅立ちから始まっている。

では Query にさらに残りの人生を過ごすところを求めさせ、旅立たせた空虚さは何によって生じたのであろうか。彼はどのような自画像を描いてしまったのだろうか。それは後半第六部第一章で、Marie Rycker にひとりの宝石職人の物語として語られている。なりゆきでホテルで一晩、彼女に向って、(彼女の夫にこの一夜が誤解されるのだが)、Query が pseudo confession⁽⁴⁾ のように語り明かす王とその下臣の宝石職人の関係に

Query の過去の姿を知ることができるのである。この王を神に、忠実なしかも富と名声と幾多の女性の愛を得た宝石職人、そしてその現実に誇りと満足をおぼえた宝石職人を、カソリックの建築家 Query に置きかえれば、その容貌を知ることができる。しかし或る時彼はもはやく彼が王の存在について考え出していた、歴史的な、哲学的な、論理的なそして語源学上のあらゆる論証〉(p.203)を信ずることができなくなっていることに気付くのである。同時に〈これまで彼が成したことは何事も、自分自身への愛の故だったにちがいない〉(p.204)と、今迄女性を愛してきたのも、そう思っていたにすぎないのではないかと思ひ始めるのである。建築家としての仕事も同様に、自分だけの楽しみのために何かを作り出してきた(p.50)のだと識るようになり、自己のみを追求する結果、彼はあらゆることに興味を失ってしまったのである。癩院の唯一人の医者である Colin 博士に向って彼は次のように言っている。

“Self-expression is a hard and selfish thing. It eats everything, even the self. At the end you find you haven't even got a self to express. I have no interest in anything any more, doctor. I don't want to sleep with a woman nor design a building.”(p.52)

(自己表現はきびしくて利己的なことなのです。それは何もかも食いつくします、自我さえも。その果てには表現しようとする自我さえなくなるのです、博士。私はこれ以上どんなことにも興味は全くありません。女と寝たくもないし、建物も設計したくありません。)

こうしてあらゆることに関して行きつくところまで来てしまった(p.21) Query は「何も。私はなにも望みません。」彼はあやうく付け加えそうになった、「それが私の問題なのです。」(p.12)と述べているように、何も望まず何ものにも関心をもたない自分をかかえて、その空虚さに押し出されて、〈ただ時を過ごすためにだけ〉(p.50)偶然のなりゆきでコンゴの奥地の癩院に到ってしまうのである。このような Query の状態は Colin 博士によって次のように説明されている。

...when he couldn't even pretend that what he felt was love, the motives for work failed him. That was like the crisis of a sickness - when the patient has no more interest in life at all. It is then that people sometimes kill themselves, but he was tough, very tough. (pp. 254-255)

(自分が感じているものが愛であるかのようなふりをするこゝさえできなくなったとき、仕事をしようとする意欲が失われてしまった。それは病気のとうげのようなもので、そんなとき患者は生きることそれ以上何の興味もない。人々が時折自殺するのはそういうときのた、だが彼は強かった、とても強靱だった。)

愛しているふりをするこゝさえ出来なくなった、すべてに何の価値も見い出せなくなった空白な心、それは自殺を企てても不思議ではないような精神状況である。虚無そのものと言ってもよいような空虚な世界である。この世界のなかで存在しつづけていくのは強さ以外の何ものでもない。生命力そのものといってもいいような、或は虚無を虚無たらしめている人間の生のもっている先へ進もうとする力の示す強さであろう。〈人間のものはすべて、ひたすら人間を起源とすると確信し、盲目でありながら見ることを欲し、しかもこの夜には終りが無いことを知っているこの男、かれはつねに歩みつづける。岩はまたもころがってゆく。〉⁽⁵⁾ というシーシュポスに匹敵するほどの粘り強い、したたかな存在である。

III

さて虚無に追われるようにして、あてのない旅を始めた Query は癩院にやってくる。そこで、彼はさまざまな人々に出会い、新しい体験を経て、内面的に少しずつ変化していくことになる。その有様が作品の前半の中心となっており、彼の内的変化を微妙に形象しているのが、笑いへの反応、或は笑いの回復ではないかと考えられる。

先述の日記(2月12日)のなかで、グリーンは神父達のカレッジの学生のような朗らかな、屈託のない笑い声を聞きながら次のように記している。

Can I make a value out of this euphoria, the continual jests and laughter around the enigmatic and unresponsive figure of X?

(この幸福そうな陽気さと、絶えざるふざけ、そして笑いを、得体の知れない、反応のないXという人物のまわりに配して、何か効果をもたらすことができるだろうか。)

グリーンはここで笑いを、X即ち Query という人物を描き出すための、一つの手段として用いることを考慮しているのだが、実際に作品の中でも、Query の死後、Colin 博士に彼の笑いについて次のように語らせている。

“You spoke just now as though he had been cured.”

“I really think he was. He'd learned to serve other people, you see, and to laugh. An odd laugh, but it was a laugh all the same. I'm frightened of people who don't laugh.” (p.255)

(「あなたはたった今、まるで彼が癒されたかのように話しましたね。」
「本当にそう思います。彼は他の人々に仕えることを、おわかりのように学びました、笑うことも。奇妙な笑いですが、それでもやっぱり笑いなのでした。私は笑わない人はおそろしいのです。)」

Query は奇妙な笑いではあるけれど、笑うことをおぼえたから、それは彼が癒されたことの一つの証明だというのである。また〈彼はここに坐って、みんなと一緒に微笑んでいられるなんて、どういうことなのだろう?〉(p.226) という笑いに対する Query の反応の変化も描かれている。このように Query を理解する一つの key-word として laugh 及び smile という表情の秘めている意味と、その表情に対する彼の反応を考えてみることは興味深いと思われるのである⁽⁶⁾。

しかしながら、当然のことではあるが、Query はめったに笑わない男として登場しており、彼が笑いの表情をみせる場面はきわめて少なく5か所位しかない。それに反して最初は笑いに対して、Query は反撥や苛立たしさを感ずる男として登場してくるのである。コンゴ河をのぼる途中、一泊した神学校で、無邪気にゲームに興ずる神父達の中であって、彼は外

人部隊に居るかのような、自分の過去について何の詮索もされない気楽さを感じているのであるが、同時に神父達の笑い声に苛立ち、ついには居たたまれなくなって、部屋から抜け出してしまふのである。

And yet - he could not tell why - their laughter irritated him, like a noisy child or a disc of jazz. He was vexed by the pleasure which they took in small things - even in the bottle of whisky he had brought for them from the boat. (pp. 9-10)

(それでも、どういふわけか、彼等の笑い声は彼を苛立たした、騒々しい子供やジャズレコードのように。彼は彼等がささいな事に、船から彼等のために持ってきた一本のウィスキーにさえ示す喜びに腹立たしく感じた。)

The laughter rose higher.... The passenger got impatiently up and walked away from them around the dreary common-room. ...The passenger wondered when it was that he had first begun to detest laughter like a bad smell. (pp. 10-11)

(笑い声が高まった。(中略) 船客は我慢できず立ち上り、わびしい休憩室を歩きまわった。(中略) 船客は嫌な臭いのように笑い声を嫌悪しだしたのはいつの頃なのだろうと思った。)

騒々しい子供やジャズレコードのように、笑い声は彼を苛立たせ、神父達の楽しむ様子に腹立たしくなり、悪臭のように笑い声を嫌がるという表現は、生理的な拒絶反応とも思えるような笑いに対する反撥を示している。その拒絶の背後には神父達に対する憎しみは無いのであるから、彼の心には生の発露としての笑いを受けつけないものがあることになる。それは心の底に鬱積した孤立感であり、自閉した世界にあって、他者の世界に対して全く無関心⁽⁷⁾であることを表わし、あらゆることが等価値になったことを識った人を表わしているのではないだろうか。〈立っている人と階段から落ちる人とのあいだには大した相違のないことを悟った〉⁽⁸⁾ 人なのである。つまり Query は 〈すべての人間を同じ長さに刈り込む時の神の鎌を直視する人が笑わない〉⁽⁹⁾ ように、虚無を直視しているといえるのではないだ

ろうか。

神学校の外へ出かけた Query は周囲の部落へ紛れ込んでしまう。そこ
でかがり火を焚いて踊っているアフリカ人達の笑う声が、彼には嘲笑のよ
うに聞えるのである。

...again he felt taunted by the innocence of the laughter.

They were not laughing at him, they were laughing with each
other, and he was abandoned, as he had been in the living-
room of the seminary, to his own region where laughter was like
the unknown syllables of an enemy tongue. (p. 11)

(再びその笑い声の無邪気さが彼を嘲っているように感じた。彼等は彼
のことを笑っているのではない、彼等はお互いに笑いあっているのだ、
彼は神学校の休憩室でそうであったように、笑いが敵国の理解できない
ことばのように思われる自分だけの領域に身をまかせた。)

彼等の笑い声の〈無邪気さ〉が Query には嘲りのように聞こえるとはど
ういうことなのであろうか。彼等が Query のことを笑っているのではな
いことは確かであるが、それでも嘲弄されているように感ずる Query
は、笑い声のなかにある無邪気さが、彼とは相容れないことを、彼を腹立
たしくさせることを表わしている。グリーンは2月4日付の日記でアフ
リカ人達の笑いについて述べている。癩患者達が労働の仕事をしなが
ら笑いさざめている様子を見て、〈ヨーロッパの何処で、人はこの癩病の労働
者のあいだで聞くような笑いを聞くだろう。だが、その逆が真実なのであ
って、彼等が病んでいたり、苦しんでいたりするとき、人は彼等のなかに
深い絶望感を感じるのである。〉と記し、〈人生は一瞬である。これが彼
等の永遠の相である。〉と述べている。ここにグリーンは苦しい現実が実
は一瞬のことであって、それは安らかな永遠を保証するものであるとい
うことを信じて疑わない彼等の無邪気な確信、或は近代人のもつ疑いに染ま
っていない無垢な心を感じとっているように思われるのである。この生そ
のものを肯定しているような本能的とも言えるような原初の無垢⁽¹⁰⁾に、
Query が挑発されたように感じたのであると考えられないだろうか。人

生のことは何もかも知り尽してしまい、燃えつきってしまった男 Query にとって、笑い声が見知らぬ敵国のことばのようであるということは、笑いが〈関係の確立〉⁽¹¹⁾を可能ならしめるものであるという意味において、まさに逆に他者との関係の断絶を表わしているといえよう。周囲の人々に何も期待せず、他者との交わりを望まず、荒涼とした内的世界に、他者に侵入されることを拒否している荒地に Query は立っているのである。

IV

関係が断絶して、いわば空洞な心を抱いて立っていた Query に、他者との関係が回復してくるのであるが、Colin 博士の言う〈奇妙な笑い〉によってその過程が表象されていると考えられる。

笑いを敵対視していた Query に初めて笑い顔に近い表情が浮かんだ場面は次のように描写されている。

“You’ll know where to look for me,” Query said, “if I should be missing.” An unexpected sound made the doctor look up; Query’s face was twisted into the rictus of a laugh. The doctor realised with astonishment that Query had perpetrated a joke. (p. 69)

(「もし私が姿を消したら」とケリイが言った、「私を探す場所があるはおわかりでしょう。」予想もしなかった声でしたので医師は見上げた、ケリイの顔がねじれて笑うかのように口が開いた。医師は驚きながらケリイが冗談をとばしたことに気づいた。)

これは第二部の最終場面であって、博士が彼の顔が歪んで口を開けて笑っているのを見て驚いているところである。全く笑わなかった Query に冗談を言わせる程の変化をもたらした出来事として考えられる、一つの事件が描かれている。それは Query が召使いとしている脱落患者の Deo Gratias⁽¹²⁾との精神的な出会いである。第二部には新しい病院の建築を

Query が着手するという事も設定されている。その仕事はすでに捨てたはずの、Query にとっての天職をもう一度彼に考え直させるという大切な意味が与えられている。しかし建築の仕事は彼にとっては何ら周囲の人間への関心からなされることではない。〈私に人間のことを語らないで下さい。人間は私の分野ではありません〉(p.58)と彼は博士に告げている。このような Query に対して博士が〈人は自分だけでは生きられません〉〈遅かれ早かれ自殺するでしょう〉(p.60)と語ると、Query は自分に〈それだけの興味があればね〉(p.60)と答えている。このように他者にも自己にも何の興味も持っていない Query に、他者への好奇心、関心を目覚めたのが Deo Gratias の事件である。或る晩 Deo Gratias が黙って姿を消してしまう。1日帰りを待った Query は夜になって、ひとりでジャングルの中へ彼を探しに出かける。暗闇の中を懐中電燈をたよりに奥へ奥へと歩いていく Query は最初は Deo Gratias の生命を気遣っているが、次第に〈知的な好奇心〉(p.64)にかられていくのである。その折の彼の心の動きは冷静に彼自身によって意識されている。例えば〈Interest began to move painfully in him like a nerve that has been frozen. He had lived with inertia so long that he examined his “interest” with clinical detachment.〉(p.65)というように Query は自分の心的状況を客観的に判断し、医師が患者を診察するように、自分で自分を見つめる視線をもつ人物として描写されている。ジャングルの中で一夜を Deo Gratias と共に過ごした Query は、博士にその夜が何かが始まった夜のように述べている。

...In a way you know this seemed a night when things begin.
I've never much minded physical discomfort. And after about
an hour when I tried to move my hand, he wouldn't let it go.
His fist lay on it like a paperweight. I had an odd feeling that
he needed me. (p. 67)

(ある点では事が始まる夜のように思えることがおわかりでしょう。私は肉体的不快はそんなに気にしたことはありません。一時間位後で手を

動かそうとした時、彼は私の手を離しませんでした。私の手に彼の手首が文鎮のように置かれていました。彼がわたしを必要としているのだという妙な感じがしました。)

Deo Gratias が恐怖にかられて、無言で身体を触れ合うことによって Query の存在を確かめ安心しようとしたことに対して、Query は自分が他人から求められているという奇妙な感じをおぼえているわけである。その感じはさらに *<But to be needed is a different sensation, a tranquillizer, not an excitement.>* (p.67) と心に安らかな思いをもたらすものであると述べている。こうして固く閉ざされていた心がやわらかく解放されたことが、先述の冗談にともなう笑いの表情をもたらしたのであろう。〈あなたは何処を探せばいいかわかるでしょう、もし私が姿を消したら〉という冗談は、他者即ち Deo Gratias の求めている幻のユートピア、ペンデレという場所に対する好奇心と関心とを種として、彼との間に人間的なつながりが芽生えたことを示している。また、自分ならば、という発想のなかには Query の自分に対する関心が生じていることを示しているし、ジャングルの暗闇の中で Query が自ら、凍っていた興味が溶けて活動を始めることと診断したように、他者と自分とを比較するという自己客観化の視線⁽¹³⁾が含まれている。

次に Query の笑いの表情が描かれているのは、彼が初めて〈私は癒されました〉(p.104)と博士に告げる場面である。その表情は修道院長の説教に対する Query の感想、或は反応というかたちでなされている。それは彼の心が、充分に他者に応答するという形で回復していることを示すのであるが、その表情は次のように描写されている。

“I really believe he’s answering something I said to him,”
Query said with a twitch of the mouth that Colin was beginning to recognise as a rudimentary smile, “but I didn’t put it

quite like that.” (p.101)

（「私は院長が私が言ったことに答えているのだと本当に信じていますよ」とケリイは口元をびくっとひきつらせて言った。それがコランには微笑の芽生えだとわかり始めていた。「でも私はその通りには言わなかった。」）

Colin 博士は Query の口元のひきつったような動きが 〈rudimentary smile〉 であると判断したのであるが、この 〈rudimentary〉 という形容詞は芽生え、とか未熟さを表わすと同時に痕跡を示すことばでもある。だからこれは微笑の芽生え、未熟な微笑であると同時に、痕跡としての微笑の両方を表わすことができる。つまりこの微笑は過去の存在から新しい芽生えの可能性を秘めており、Query の心の回復の可能性を暗示している。そして Query は非常に安定して、満足していることを言い表わすようになってくるのである。例えばジャーナリスト Parkinson を乗せた船が着く夕方には博士に向かって 〈私が幸せだということがおわかりでしょう〉 (p. 119) と述べ、その有様は 〈He closed his mouth on the phrase too late; it had escaped him on the sweet evening air like an admission.〉 (p. 110) と描写されている。或は病院の建築を手伝っている Joseph 神父には 〈私はここで満足しています〉 (p. 163) と述べ、Thomas 神父には 〈ここを立去ったら他に行くところはないのです。〉 (p. 174) と言っている。また後になって Marie Rycker の偽りの証言のために病院を立去ろうと決心した時、Query は博士に 〈どこに行っても、この部屋をなつかしく思うでしょう〉 (p. 246) とか、〈あなたとあなたの奥さんと同じささやかな地面に私の生涯を終えるのが望みでした〉 (p. 247) と言っている。Query はこの病院で生涯を過ごすことを決めていたのであって、その時点で、自分の居べき場所を識ったという意味で、自己のあるべき姿を識ったということができよう。もし Query の心の回復が、つまり人間性の回復がこの作品の主題であるならば、この自己証明⁽¹⁴⁾ がなされたところで、作者はプロットを終結していたのではないかと、という疑問が生じてくるのである。

この疑問を解く一つの手がかりが、笑いの表情の描き方にあるのではな

いだろうか。かすかに口元をひきつらせるような、それと気付く人にしか笑いとはわからないような笑いが、満足し、充足し、自分の生き方を心に決めた人の表情とは考えられないからである。Query の笑いは一種の歪んだ不完全な笑いであって、充足している人間のなす心の底からの完全な笑い⁽¹²⁾とはほど遠いのである。その最も良い例が Marie に見せた、Query の顔をかえって醜く見せる微笑である。

“I can hardly strike a woman,” Query said. A sudden rictus round the mouth startled her. Perhaps he was trying to soften the phrase with a smile, but it made his face all the uglier.

(p.181)

(「女性をなぐれませんからね」とケリイは言った。突然口が開いたので彼女は驚いた。おそらく微笑してことば遣いをやわらげようとしたのだろう、だが一そうそれは彼の顔を醜くした。)

この場合は Query が Marie の夫、Rycker に腹を立てて会いに出かけた場面である。だから彼女を驚かせた口元の動きは、怒りを隠そうとした無理な笑いであることは理解される。しかし顔を醜く見せる笑いとは何であろうか。つまりここで示されているのは自己を解放する笑いではなく、自己と他者の間に或る関係を作り出そうとする手段としての笑いである。それは自然発生的な笑いではなく、自分の現実を補うためのものである。この補うという作為が、彼の顔をより醜く見せたのではないだろうか。このような自己を客観的に見つめることによって生まれてくる笑いの表情は、Query の死の場面にも描かれている。

Rycker が妻 Marie と Query との間を誤解して、半狂乱になって Query の姿を求めてやって来たとき、そのことを聞いた Query は過去の多くの女性関係と、現在の Marie との無実の関係を比べて、〈無実の姦通者か。喜劇には悪くない題だ〉(p.249)と述べ〈微笑しようとして彼の口が動いた〉(p.249)と描写されている。客観的に見れば現在の自分の立場が喜劇的なものであることを Query は理解した、それが〈His mouth

moved in the effort of a smile〉という表情になっているのではないだろうか。怒りもせず冷静に、相対的に自分の立場を見ているのである。このような彼の態度は Rycker が発砲する瞬間の Query の笑いのなかにも見い出される。銃を持って現われた Rycker に神父の一人が、家の中に入って落着きなさいとすすめているところである。

“...And a cold shower in the morning,” he added, and as though to illustrate his words, a waterfall of rain suddenly descended on them. Query made an odd awkward sound which the doctor by now had learned to interpret as a laugh, and Rycker fired twice. (p.125)

(「(中略)そして朝になったら冷たいシャワーを」と彼が付け加えた、すると彼のことばを絵に描くように滝のような雨が突然彼等の上に降ってきた。ケリイは奇妙な不器用な声をたてた、それを医師は今では笑いとして解釈できるようになったのだが、ライケルが二発射った。)

朝になったら冷たいシャワーを、という神父の言葉に答えるように、降りそぐ雨を見た Query からもれた笑いは、どこか自我を離れた、囚われていない彼の心の動きを示している。緊迫した状況のなかで、そしてその中心点に自分が立っているにもかかわらず、冷めた客観的な判断、つまり一歩離れたところから眺めやる彼の視線が感じられるのである。この声に腹を立てた Rycker が〈私を笑った〉(p.251)という、Query は Rycker を笑ったのではなく自分を笑ったのだと述べている。

“Not at Rycker,” Query said....

Query said, “Laughing at myself.”...

“He doesn’t laugh easily,” the doctor said, and again there was a noise that resembled a distorted laugh.

“Absurd,” Query said, “this is absurd or else...” but what alternative, philosophical or psychological, he had in mind they never knew. (pp.251-252)

(「ライケルではない」とケリイが言った。(中略)ケリイが言った「私自身を笑っているのだ」(中略)「彼はたやすくは笑わないんだ」と医師がいった、すると再び歪んだ笑いに似た声がした。「ばかばかしい」ケリイが言った「これは不条理かさもなければ……」しかしそれに替るどのような哲学的な或は心理学的なことを思っていたのか、彼等にはわからなかった。)

自分に対する歪んだ笑いに似た声は、先述したように、自己を客観的に見る覚めた視線の鋭さと距離を表わしている。その視線で捕えた自己の姿が〈absurd〉ということばで言いあらわされている。このことばは、一つには本当は有りもしない Marie とのこのために死ぬというばかばかしさを表わしている。さらに Query にとっては、この癲病院を終生のすみかとして生きてゆくことを決心し、また生きてゆけそうだと判断したときに、死を迎えねばならない不条理をあらわしている。少なくとも明日へと生き続ける理由が見つかったとき、生への希望をもったときに迎える死であるということができる。しかし問題はこの〈this is absurd〉ということばが、その不条理のなかで死ぬ Query 自身のことばとして語られていることである。自らの状況が不条理であると識っている Query として創り出されていることである。客観的な視線が自らの状況に向けられたとき、Query は自らが不条理の存在であると判断した。その自己認識がなされたとき、彼は、そこから、つまり不条理のただなかから、また出発の第一歩を踏み出すことができる。シーシュポスと一緒に、岩を永遠に押し上げ続けるために出かけることができる。

しかし Query のことばは〈不条理か、さもなければ…〉と不明のままに終わっている。この曖昧であることは、これまで彼がこのアフリカの奥地で生き、この大地に帰っていくのだと、自分について確認したことが、実はすべて無駄であったと判断したことを表わしているのではないだろうか。つまり彼は自らの存在の不明瞭さ、不確かさを、即ち、人間は自らの存在については何も知ることができないということを言い表わす人物として形象されているのではないだろうか。燃えつきた心、虚無を知ったと思った

男・自画像を描いてしまった男 Query は、自らについて知り尽くしてしまったと判断したが、実は何も知ることはできなかったということである。Query が埋葬された後、Joseph 神父は〈He was an ambiguous man.〉(p.252) と言っている。先にも述べたように Query について不明なところを残すこと、彼がいかなる人物であったかを明確にしないことが作者の目的の一つであったことから理解されるように、正体不明の男であった、ということは Query の姿をみごとに言い当てたものだと考えられる。Query を取り巻いた人々は、彼が最も信頼した Colin 博士も含めて、各々の与えられた性格に応じて、Query という人物を理解し、語り、判断している。しかしどの人物の判断も結局的を射ているとは言えないし、またどの人物の判断も最終的に偽りであるとは言えないと考えられる。つまり Query とは不透明なガラスのような存在で、彼を見つめる人々は、彼のなかにそれぞれの個性に応じて自分の姿が映し出されているのを、のぞき込んでいるのではないだろうかと考えられるのである。

V

〈an unknown man〉である Query を知るために、笑いへの反応と笑いの表情を手がかりにして、彼の内的世界を探ってきたわけであるが、手法的には笑いには二つの意味があるようである。一つには彼と他者（彼をとりまく世界）との間をつなぐ脆いかけ橋として用いられ、また一つには、彼が自己を見つめる道程で、その鋭く乾いた自己客観化する視線を受けて、ほころびかけた、末熟な日かげの花である笑いのが考えられる。このような笑いのかげに、結局 〈an ambiguous man〉でしかあり得ない Query が描かれていたのであろうか。グリーン の 2月10日付の日記のなかに次のような 〈absurdity〉に関する一節がある。

How often people speak of the absurdity of believing that
life should exist by God's will on one minute part of the immense

universe. There is a parallel absurdity which we are asked to believe, that God chose a tiny colony of a Roman empire in which to be born. Strangely enough two absurdities seem easier to believe than one.

(広大な宇宙のごく一部に、神の意志によって生命が存在すると信ずることの不条理について、なんと人々はしばしば語ることだろう。これと照応する不条理、神が生まれ給うのにローマ帝国の小さな植民地をお選びになつたと信ずるように求められている不条理がある。まったく不思議なことだが一つの不条理よりも二つの不条理のほうが信じやすく思われる。)

ここに語られている二つの不条理、神の側と人間の側の不条理に従って考えるならば、Query は人間の側の不条理の表象である。人間のことからは人間では解決されず、もう一方の不条理を合わせることによって、左右が均衡を保ち、一つの世界が完成するわけである。この点で不条理を不条理の故に自らの運命として選びとり、自らの、つまり人間の側の責任だけで終結しようとする世界とは異っている。従って虚無を自らの運命として選びとり、虚無を生きようとするシーシュポスと、Query とは、投げ込まれた世界がまったく異っている。Query は陽の領域に支えられた陰の領域の住人なのである。

註

- (1) *In Search of a Character: Congo Journal*, by Graham Greene 1961, The Bodley Head Ltd pp. 41-42.
- (2) *The Quiet American I*—Fowler 像を求めて—「英米文学研究」第10号梅光女学院大学英米文学会, 1974 参照。
- (3) 註(1)に同じ
- (4) *Graham Greene: The Aesthetics of Exploration*, by Boardman, G.Rosina University Microfilms, Inc. Ann Arbor, Michigan 1963, p. 262.
- (5) 『シーシュポスの神話』カミュ著, 清水徹訳 新潮文庫 p.173.
- (6) 例えば Kelleher, J. Patrick も笑えないことがケリーの精神状況に付随することとして意図されていると述べている。*The Orthodoxy and Values of Graham*

Greene, University Microfilms, Inc. Ann Arbor, Michigan 1966, p. 306.

- (7) 『笑いについて』 マルセル・パニョル著, 鈴木力衛訳 岩波新書 p.91.
- (8) 同上 p.92.
- (9) 同上
- (10) *The Quiet American II—The Innocent—* 「英米文学研究」第11号梅光女学院大学英米文学会, 1975 参照。
- (11) 註(6)に同じ p.106.
- (12) この人物は自然界の一部分であるかのような描写がなされていて, 彼の云う幻のユートピア, ペンデレと共に興味ある登場人物である。
- (13) Hanlon, S. J. Robert Michael も冗談は自分の状況を客観化する能力を表わす, と述べている。 *Graham Greene's Religious Sense*, Univ. Microfilms, Inc. Ann Arbor, Michigan 1972, p. 94.
- (14) ケリイは気付いていないがペンデレに到着している, という説もある。 *Concepts of Sainthood in the Novels of Albert Camus and Graham Greene*, by Gusdorf, B. Neuroth Univ. Microfilms, Inc. Ann Arbor, Michigan 1968, p.229. 脚註。